

# 叙事詩の宗教哲学

— Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (IX) —

茂木 秀 淳

〈Mokṣadharmā 和訳〉<sup>1</sup>

[200章] (=D.207章, 7518-7566)

ユディシュティラは言った。

- (1) 祖父よ、偉大な英知をもつ者よ、蓮の花のごとき目をもち、揺るがぬ創造者にして、被造物にあらず、存在物の生成消滅（の拠り所）である（cf.MBh.XII.187.4）ヴィシュヌについて、
- (2) ナーラーヤナについて、感官の支配者（hṛṣīkeśa）について、ゴーヴィンダ（牛飼）について、征服されざる者について、長い髪をもつ者について、真実のままに私は聞きたい、バラタ族のすぐれた者よ。

ビーシュマは言った。

- (3) そのことは、ジャマド・アグニの息子の言葉から<sup>2</sup>、ラーマについて、神仙ナーラダについて、そしてクリシュナとドヴァイパーヤナについて伝えられている。
- (4) アンタヤデーヴァラが、父よ、そして大きな熱力をもつヴァールミーキが、そしてマールカンデーヤが、ゴーヴィンダにおける偉大な超自然的出来事を語っている<sup>3</sup>。
- (5) バラタ族のすぐれた者よ、遍在者は、長い髪をもつ者、至尊者、自在者、威光ある者、プルシャ、一切者というように、さまざまに伝承されている。
- (6) また、世間ではバラモンたちが、シャルンガ弓をもつ者の<sup>4</sup>もろもろの偉大さを<sup>5</sup>知っている。それを聞くべし、ユディシュティラよ、長い腕をもつ者よ。
- (7) そして古譚を知る人々が、人の王よ、余すところなく<sup>6</sup>ゴーヴィンダについて語ったことを私は語るであろう。
- (8) 生き物の本体であり、偉大なる（mahātmā）最高のプルシャは、風<sup>7</sup>、火、水、虚空そして地という大元素を心に思った<sup>8</sup>。

1 本稿は『叙事詩の宗教哲学—Mokṣadharmā-parvan 和訳研究(VIII)—』（信州大学教育学部研究紀要第86号 1995年12月）に続くものである。略号などは前稿に準ずる。

2 jalpataḥ N. jalpataḥ jalpād vacanāt

3 P. kathayaty D. kathayanty

4 P. śārṅgadhanvanaḥ D. śārṅgadhanvani

5 P. mähātmyāni D. mahātmani

6 P. aśeṣeṇa hi D. karmāpi tv iha

7 vāyur Deussen: Wind [lies vāyum]

8 P. caivānvakalpayat D. cānvakalpayat

- (9) あらゆる生き物の支配者にして威光ある彼の偉大なる最高のプルシャは、地を見た後、水の中に寝台を<sup>9</sup>創造した。
- (10) 一切の熱力からなる者は、そのめでたき寝台に<sup>10</sup>横たわりつつ、あらゆる生き物の最初に生じるサンカルシャナを心に思った<sup>11</sup>。
- (11) 「すべての生き物の拠り所（であるサンカルシャナ）を心によって（創造した）」と我々は聞いている<sup>12</sup>。彼の生き物の本体である<sup>13</sup>サンカルシャナは、既に存在したものとこれから存在するものの両者を保持している。
- (12) その後、長い腕をもつ者よ<sup>14</sup>、偉大なる彼の者が現れると、その臍に太陽のごとき神聖な蓮の花が生じた。
- (13) すると彼の至尊なる神、あらゆる生き物の祖父であるブラフマー神が、蓮の中で四方を輝かせつつ<sup>15</sup>、誕生したのである、王よ。
- (14) この偉大なる者が生じると、長い腕をもつ者よ<sup>16</sup>、その中にマドゥという名の無始の<sup>17</sup>大悪魔が闇から<sup>18</sup>生じた。
- (15) 最高のプルシャは、ブラフマー神を増大させつつ<sup>19</sup>、その恐ろしい行為と恐ろしい知識を<sup>20</sup>もつ恐ろしい者を殺した。
- (16) その殺害の故に、王よ、あらゆる神・悪魔・人間は、あらゆるサートヴァットの<sup>21</sup>雄牛をマドゥ殺しと呼んだのである。
- (17) ブラフマー神は、ダクシャを七番目とする、精神からなる（mānasa）息子を創造した。（それらは）マリーチ、アトリとアンギラス<sup>22</sup>、プラストヤ、プラハ、クラトッである。（cf.MBh.XII.201.4）
- (18) マリーチは、王よ、最初に生まれた息子としてカシュヤバを創造した<sup>23</sup>。精神からなり光輝に満ちた最もすぐれたバラモン<sup>24</sup>を創造したのである。
- (19) ブラフマー神は、マリーチの兄もまた親指から創造した<sup>25</sup>。彼は、バーラタ族のすぐれた者よ、ダクシャという名の造物主となった。

9 P. śayanam D. bhavanam

10 P. śayane śubhe D. puruṣottamaḥ

11 P. saṃkarṣaṇam acintayat D. saṃkarṣaṇam akalpayat N. saṃkarṣaṇam ahaṃkāram

12 P. manaseti viśuśrūma D. manasetiḥa śuśrūma

13 P. bhūtātmā D. bhūtāni

14 P. mahābāho D. mahābāhu

15 P. bhāsayan dīśaḥ D. bhrājayan deśaḥ

16 P. mahābāho D. mahābāhu

17 pūrvajo N. pūrvajo 'nādir

18 P. tamaśaḥ D. tamaśā

19 P. brahmaṇopacitaṃ D. brahmaṇo 'pacitaṃ

20 P. ugrāṃ buddhiṃ D. ugraṃ karma

21 sarvasātvatām N. sāt paramātmā tadvatām sātvatāṃ yoginām ity arthaḥ

22 P. marīcim atryaṅgirasau D. marīcim atryaṅgiraśaṃ

23 P. putraṃ cāsṛjad agrajam D. putram agrajam agrajaḥ

24 P. brahmasattamam D. brahmavittamam

25 P. asṛjad D. sasṛje

- (20) その造物主に、まず、十三人の娘が生じた、バーラタ族よ。その中で最も年上のものはディティであった。
- (21) あらゆるすぐれたダルマを知り、汚れなき誉れをもち、大きな名誉をもち、マリーチより生まれたるカシュヤパは、王よ、すべての（娘）の夫となったのである。
- (22) 大きな幸運をもち、ダルマを知る造物主たるダクシャは、これらの娘の後にさらに十人の娘を生ぜしめた後、それらをダルマに与えた。
- (23) ダルマの息子たちがヴァス、限りなき熱力をもつルドラ、ヴィシュヴァデーヴァ、サーディヤ、マルトヴァントである、バーラタ族よ。
- (24) 他にこれらの娘とは別に二十七人のより若い娘が（ダクシャには）いた。大きな幸運をもつソーマがその娘たちすべての夫となった。
- (25) 他の者（カシュヤパの娘）たちは<sup>26</sup>、ガンダルヴァ、馬、鳥 (dvijān)、牛、キムブルシャ、魚、植物<sup>27</sup>、木を生んだ。
- (26) アディティは大きな力をもつすぐれた神アーディトヤたちを生んだ。その中にヴィシュヌが矮人として生じ、そして主であるゴーヴィンダが生じたのである。
- (27) 彼（ヴィシュヌ）の一步によって<sup>28</sup>神々の繁栄 (śrī) は増大し、そして悪魔たち (dānava) は征服された。ディティより生まれたアスラの子孫も（征服されたのである）。
- (28) ダヌはヴィプラチッティを長とする悪魔 (dānava) を創造した。ディティはあらゆる勇猛な (mahāsattva) アスラを生んだ<sup>29</sup>。
- (29) マドゥを殺した者（クリシュナ）は、昼と夜、季節に従った時間、午前と午後というこれらすべてを心に思った<sup>30</sup>。
- (30) 彼は、理性によって水を<sup>31</sup>創造した。そして雲、そして動くものと動かぬものを創造し、大きな光輝を伴うあらゆる地を創造したのである。
- (31) それから長い腕をもち<sup>32</sup>威光あるクリシュナは再び、ユディシュティラよ、すぐれたバラモン百人を<sup>33</sup>口から創造したのである<sup>34</sup>。
- (32) 両腕から百人のクシャトリアを、両腿からヴァイシャ百人を、両足からシュードラ百人を、長い髪をもつ者（クリシュナ）は（創造したのである）、バラタ族の雄牛よ。
- (33) このように四種のヴァルナを生ぜしめた後、かの大きな栄光をもつ<sup>35</sup>威光ある者は<sup>36</sup>、一切の存在物を監視し (adhyakṣam) 維持する者を (dhātāram) 創造した<sup>37</sup>。

26 itarāḥ N. itarāḥ kaśyapastryaḥ Deussen: jene anderen [dreizehn Frauen des Kāśyapa]

27 P. audbhīdāṃś ca D. udbhijjāṃś ca

28 P. vikramaṇād eva D. vikramaṇāc cāpi

29 P. vyajāyata D. ajijanat

30 P. sarvam evānvakalpayat D. sarvam evānukalpayat

31 P. buddhyāpaḥ D. pradhyāya

32 P. mahābāhuḥ D. mahābhāgaḥ

33 śatam N. śatam anantam

34 P. mukhād asṛjata D. mukhād evāsṛjat

35 P. mahāyaśaḥ D. mahātapāḥ

36 P. prabhuḥ D. svayam

- (34) (クリタユガにおいては) 人々に身体を維持したいという望み (śraddhā) が存在する間人々は生き、彼らには死神ヤマによって引き起こされる恐れはなかった。
- (35) 人々には男女の法は (maithuno dharmo) 存在しなかったのである、バラタ族の雄牛よ。人々が心に思うだけで (saṃkalpād eva) 子供は生まれたのである。
- (36) その後<sup>38</sup>, トレーターユガにおいては、子孫は長く心に思うことによって<sup>39</sup>生まれた。彼らにとっても男女の法はなかったのである、人々の王よ。
- (37) ドヴァーパラ (ユガ) において、人々には男女の法が生じたのである、王よ。そしてカリユガにおいて、王よ、人々是对立するに至ったのである。
- (38) 以上のように、生き物の主は、王よ、よき監視者として讃えられている<sup>40</sup>。しかし、クンティーの子よ、監視者をもたない者たちについても<sup>41</sup>私は語るであらう<sup>42</sup>。
- (39) 南方に生まれた者としては、身体を守る者よ(?)<sup>43</sup>, すべてのアンドラカ、ウトサ(?)<sup>44</sup>, プリンダ, ジャバラ, チューチュパ, そしてマンダバたちがいる<sup>45</sup>。
- (40) 北方に生まれた者としては——彼らについても語ろう——ヤウナ, カンボージャ, ガーnderラ, キラータ, そしてバルバラたちがいる。
- (41) 犬・鴉・鳥・はげ鷲と<sup>46</sup>等しい, これら罪を為す者たちは, この地上をうろつくのである, 人の王よ。
- (42) これらの人々はクリタユガにおいてはこの地上をうろつくことはない。トレーターユガ以降に, この人々は存在するのである<sup>47</sup>, バラタの雄牛よ。
- (43) 従って, そのユガの終わりの恐ろしいサンディヤーの時に<sup>48</sup>, 王たちはお互いに会って, (彼らを) 攻撃したのである。
- (44) 偉大なる者の顕現であり<sup>49</sup>, 神々の神仙であり<sup>50</sup>, あらゆる世界を見る者であるこのナーラダは, 以上のように語ったのである, クル族のすぐれた者よ。

37 Dはこの後に次の三詩節が挿入されている。従って, P. と D. では詩節番号が3つずれることになる。

vedavidyāvidhātāraṃ brahmāṇam amitadyutim /  
 bhūtamatṛgaṇādhyaśaṃ virūpākṣaṃ ca so 'sṛjat /  
 śāsītāraṃ ca pāpānāṃ pitṛṇāṃ samavartinam /  
 asṛjat sarvabhūtātmā vidhipaṃ ca dhaneśvaram  
 yādasām asṛjan nāthaṃ varuṇaṃ ca jaleśvaram /  
 vāsavaṃ sarvadevānām adhyaśam akarot prabhuḥ /

38 P. tatra D. tatas

39 P. kāle saṃkalpāj D. kāle saṃsparśāj

40 P. prakīrtitaḥ D. tathocyate

41 P. niradhyakṣāṃs tu D. nirapekṣāṃś ca

42 P. kīrtayiṣyāmi tān api D. kīrtayiṣyāmi tac chṛṇu

43 P. talavara D. naravara

44 P. utsāḥ D. guhāḥ

45 P. cūcupā maṇḍapaiḥ saha D. cūcukā madrakaiḥ saha

46 P. śvakākabalagrḍhrāṇāṃ D. śvapākabalagrḍhrāṇāṃ

47 P. vartante D. vardhante

48 P. mahāghore saṃdhyākāle yugāntike D. mahāghore saṃdhyākāla upasthite

49 P. prādurbhāvo mahātmanaḥ D. prādurbhūto mahātmanā

50 P. devadevarṣir D. devaṃ devarṣir

- (45) また長い腕をもつナーラダも、人の王よ、正しくクリシュナが最高者であり、永遠であると考えたのである、バラタの雄牛よ。
- (46) 以上のように、この方は、長い腕をもち、長い髪をもち、真の勇猛さをもち、思量を超え、蓮華の目をしている。これはただの人 (kevalamānuṣa) ではない。

[201章] (=D.208章, 7567-7603)

ユディシュティラは言った。

- (1) かつて生き物にはどのような支配者たちがいたのか、バラタ族の雄牛よ。そして、いかなる聖仙が、大きな幸運をもつ者として、それぞれ四方において (dikṣu) 伝えられているのか。

ビーシュマは言った。

- (2) バラタ族のすぐれた者よ、汝が私に<sup>51</sup>尋ねたことについて私の言うことを聞くべし。四方にはそれぞれ生き物の支配者が伝承されている<sup>52</sup>。
- (3) 最初に唯一の自存者たる聖なる永遠のブラフマー神が存在した。ブラフマー神には偉大な自存者たる七人の息子がいた<sup>53</sup>。
- (4) (彼らは) マリーチ、アトリとアンギラス、プラスタヤ、ブラハ、クラトゥ、そして大きな幸運をもつヴァシシュタである。彼らは自存なる者 (ブラフマー神) に匹敵した<sup>54</sup>。(cf.MBh.XII.200.17)
- (5) このことは<sup>55</sup>「七人のブラフマー神」として古譚の中に確定されている<sup>56</sup>。これより以後私はこれらすべての造物主について語るであろう。
- (6) 永遠にして聖なるプラーチーナバルヒスは、アトリの家系から生まれブラフマー神を母胎とする者である。彼から十人のプラーチュータスが (生まれた)。
- (7) この十人には一人の息子がいた。それはダクシャという名の造物主である。彼には二つの名前があり、世間ではダクシャそしてカ (ka) と呼ばれている。
- (8) マリーチにはカシュヤパという息子がおり、彼には二つの名前が伝わっている<sup>57</sup>。一つは<sup>58</sup>アリシュタネーミであり他方は<sup>59</sup>カシュヤパであると知られている。
- (9) 胸より生じたアンガ(?)<sup>60</sup>、そして吉祥にして精力があり、神々の千ユガの間崇拜を行った王パウマ<sup>61</sup>、
- (10) そして聖なるアルヤマン、そして他のものが<sup>62</sup>息子である、力ある者よ。これら是指

51 P. mā D. māṃ

52 P. ye sma dikṣu pratyekaśaḥ smṛtāḥ D. ye 'smin dikṣu ye caṛṣayaḥ smṛtāḥ

53 P. sapta putrā vai D. sapta vai putrā

54 P. sadṛśā D. sadṛśo

55 P. eṣa D. ete

56 P. niścayo gataḥ D. niścayaṃ gataḥ

57 P. śrute D. smṛte

58 P. ity ekaṃ D. ity eke

59 P. ity aparaṃ D. ity apare

60 P. aṅgaś caivaurasaḥ D. atreś caivaurasaḥ

61 P. bhaumaś ca D. somaś ca

62 P. cānye D. cānya

示者であり<sup>63</sup>、世界の創造者である<sup>64</sup>とされている。

- (11) 不動なる者よ、月 (śaśabindhu) には一万人の妻がいる。当時、その一人ずつに一千人の息子が生まれたのである。
- (12) かくして、彼の偉大なる者には一千万人の<sup>65</sup>息子がいたのである。そして彼らは<sup>66</sup>誰も他の造物主を (父として?) 望まなかったのである。
- (13) 賢者たちは子孫をかつて<sup>67</sup>月より生まれたものと語る。造物主のこの偉大な家系は<sup>68</sup>グリシュニ家系の始まりである。
- (14) (以上のように) もろもろの生き物のこれら栄光ある主たちが語られた。これより後、私は三界を支配する神々について語るであろう。
- (15) バガ、アンシャ、アルヤマン、ミトラ、そしてヴァルナ、サヴィトリ、ダートリ、そして大きな力をもつヴィヴァスヴァット、
- (16) プーシャン、トヴァシュトリ<sup>69</sup>、インドラ、そして十二番目はヴィシュヌであると言われる。これら<sup>70</sup>十二人のアーディトヤはカシュヤパの息子たち (ātmasambhavāḥ) である。
- (17) ナーサトヤとダスラはアシュヴィン双神とも伝えられている。彼らは八番目の造物主である<sup>71</sup>マルターンダの息子たち (ātmajau) である<sup>72</sup>。
- (18) トヴァシュトリの息子は、吉祥にして栄光あるヴィシュヴァルーパー、アジャ、エーカバドゥ、蛇神アヒ、ブドゥニヤ、ヴィルーパークシャ、そしてライヴァタ、
- (19) ハラ、パフルーパー、トリアンバカ、スレーシュヴァラ、サーヴィトリ、ジャヤンタ、そして無敵のピナーキンである。大きな幸運をもつ八人のヴァスについては既に語られた。(MBh.XII.200.23)
- (20) 以上、この種の天神たち (devāḥ) は造物主であるマヌから (生まれたのである)。そして、彼らは、かつては神々 (surāḥ) として、そして祖先として、というように二種類に伝えられている。
- (21) サードヤとシッダには、性質と姿に歓喜する者たち<sup>73</sup>と、それとは別の<sup>74</sup>者たちがい

63 ete pradeśāḥ N. pradeśāḥ pradiśanti ājñāpayantīti pradeśā īsanaśilā ity arthaḥ

64 prabhāvanāḥ N. prabhāvanāḥ prakarṣeṇa sraṣṭāraś ca

65 P. śatasahasrāṇāṃ śataṃ D. śatasahasrāṇi daśa

66 P. na ca te D. ca na te

67 P. paurāṇiṃ D. purāṇāḥ

68 P. mahān vaṃśāḥ D. mahāvāṃśāḥ

69 P. pūṣā tvaṣṭā D. tvaṣṭā pūṣā

70 P. ta ete D. ity ete

71 P. prajāpatiḥ D. mahātmanāḥ

72 この後D.は次の句を挿入し、次の第18節詩の ab と併せて第18節詩としている。

te ca pūrvaṃ surāś ceti dvividhāḥ pitarāḥ smṛtāḥ / (=P.20cd, D.21cd)

(彼らは、かつて、神々そして二種の祖先として伝えられた。)

このため詩節の対応関係は P.18cd=D.19ab, P.19ab=D.19cd, P.19cd=D.20ab, P.19ef=D.20cd となり

(P.19詩節は三行詩)、詩節番号が1つずつずれる。

73 P. śīlarūparatās tv anye D. śīlayauvanatas tv anyas

74 P. tathānye D. tathānyaḥ

- る(?)。リブとマルトは神々の集団であると規定されている<sup>75</sup>。
- (22) 同様のものとして、ヴィシュヴェデーヴァ、そしてアシュヴィン双神も述べられている。これらのうち (teṣām) アーディトヤ神群はクシャトリアであり、マルト神群はヴァイシャである。
- (23) アシュヴィン双神は恐ろしい苦行に集中した<sup>76</sup>シュードラであると伝えられている<sup>77</sup>。そしてアンギラスからの神々はバラモンであると伝えられている、と定まっている。このようにすべての神々の四姓が語られた<sup>78</sup>。
- (24) これらの神々を早朝礼拝するならば、その者は、自分から生じたにせよ他人によって為されたにせよ、あらゆる罪から解放される。
- (25) ヤヴァクリータ、ライビヤ、アルヴァーヴァスとパラヴァス、アウシジャ、カクシーヴァット、ナラ<sup>79</sup>、アンギラスの息子たち、
- (26) 聖仙メーダーアティティの<sup>80</sup>息子であるカンヴァ、そしてバルヒシャダ、これら三界の創造者、そして七人の聖仙は東方にいるのである、王よ。
- (27) ウンムチャとヴィムチャ、精力あるスヴァスティアートレーヤ、プラムチャ、イドゥマヴァーハ<sup>81</sup>、そして聖なるドリダヴラタ、
- (28) ミトラとヴァルナの息子、熱力をもつアガスティヤ、これらの梵仙たちは常に南方に住する<sup>82</sup>。
- (29) ルシャドグ、カヴァシャ、ダウミヤ、精力あるバリヴィヤーダ、エーカタ、ドヴィータ、トリタという偉大な聖仙たち、
- (30) アトリの聖なる息子、威光あるサーラスヴァタ、これら九人の<sup>83</sup>偉大なる者たちは、西方に住する。
- (31) アートレーヤ、ヴァシシュタ、偉大な聖仙カシュヤパ<sup>84</sup>、バラドヴァージャを伴うガウタマ<sup>85</sup>、ヴィシュヴァーミトラ、そしてカウシカ、
- (32) そして偉大なる聖者リチーカの息子であるジャマド・アグニ、これら七人は北方に住する<sup>86</sup>。
- (33) これらそれぞれの方位において述べられた恐ろしい熱力をもつ者たちは、偉大なる証

---

75 P. coditā gaṇaḥ D. codito gaṇaḥ

76 P. samāhitau D. samāsthitau

77 P. matau D. smṛtau.

78 P.は三行詩、D.は二行詩である。従って、以下P.とD.は一行ずつずれ、P.のab句はD.のcd句に、P.のcd句はD.のcd句に対応するようになる

79 P. nalaś ca D. balaś ca

80 P. ṛṣer medhātitheḥ D. ṛṣir medhātitheḥ

81 P. cedhmavāhaś ca D. caidhmavāhaś ca

82 P. āśritā D. āsthitā

83 P. ete nava D. ete caiva

84 P. kaśyapaś ca D. kāśyapaś ca

85 P. gautamaḥ sabharadvājo D. gautamo 'tha bharadvājo

86 P. udicim diśam āśritāḥ D. udicim āśritā diśam

人であり、もろもろの世界の創造者である。

- (34) このようにこれら偉大なる者はそれぞれの方位に存在している。(人は) これらを称賛した後、あらゆる罪から解放されるのである。
- (35) これらはそれぞれの方位に存在しているが、どれであれその一つの方位に保護を求める者は、あらゆる罪から解放される。そして幸運を得て (svastimān) 家々を廻るべし<sup>87</sup>。

[202章] (=D.209章, 7604-7640)

ユディシュティラは言った。

- (1) 祖父よ、偉大な英知をもつ者よ、戦闘において真実の勇気をもつ者よ、私は不変の自在者クリシュナについて余すところなく聞きたい。
- (2) 彼の大きな熱力、そしてかつての<sup>88</sup>行為、そのすべてを私にありのままに話すべし、バラタの雄牛よ<sup>89</sup>。
- (3) ハリは<sup>90</sup>どうして動物の姿を<sup>91</sup>とったのか (dhāritavān), いかなる行為を行うために<sup>92</sup>(動物の姿となったのか), それを私に語るべし、祖父よ<sup>93</sup>。

ビーシュマは言った。

- (4) 私はかつて狩に出かけた時、マールカンデーヤの住処 (āśrma) に滞在した (sthitāḥ)。そこで私は千人の聖者 (muni) が座っているのを見た。
- (5) それから彼らは蜜を混ぜた供物で私に敬礼した。私はその敬礼を受け (pratigrahya ca tām pūjām), 聖者たちに挨拶した。
- (6) この話はそこで偉大な聖仙カシュヤパによって語られた。心喜ばず神聖なその話を、ここで心を集中して聞くべし。
- (7) かつて、怒りと貪欲を伴う悪魔の主な者ども (dānavamukhya), 力に酔ったナラカを初めとする百人からなる大悪魔ども (mahāsura),
- (8) そして、他の多くの戦闘に狂った悪魔ども (dānava) は、神々のこの上ない繁栄 (samṛddhi) に耐えられなかった。
- (9) 悪魔どもに苦しめられた神々、そして神仙たちは、王よ、あちこち逃げ回ったが (viśamānās tatas tataḥ) 安全な場所を得なかった。
- (10) 彼ら天に住む者は、大地が苦しみの姿をしているのを<sup>94</sup>見た。すなわち、恐ろしい姿

87 D.37 は一行詩である。

88 P. purātanam D. purākṛtam

89 P. prabrūhi bharatarṣabha D. brūhi tvam puruṣarḥbha

90 P. hariḥ D. prabhuḥ

91 P. tiryagyonigataṃ rūpaṃ D. tiryagyonigato rūpaṃ

92 P. kāryavisargeṇa D. kāryanisargeṇa

93 P. tan me brūhi pitāmaha D. tam akhyāhi mahābala

94 P. pṛthivīm cārtarūpām D. pṛthivīm ārtarūpām N. pṛthivīm buddhiṃ vāsanārūpabijānām kṣetrabhūtām dānavaiḥ kāmakrodhair abhisamstīrṇām sarvato vyāptām



をした怪力の悪魔どもが満ちあふれ<sup>95</sup>、重荷に苦しみ、引き裂かれ<sup>96</sup>、苦しみ沈みつつあるのを見た<sup>97</sup>。

- (11) そこでアディティの息子たちは、恐怖で震えて、ブラフマー神に次のように言った。  
「ブラフマーよ、どうすれば我々は悪魔どもの攻撃に<sup>98</sup>(勝つことが)できようか<sup>99</sup>。」
- (12) 自存なる者は彼らに次のように言った。「わたしはここで一つの手段 (vidhir) を与えよう。獲物に酔い<sup>100</sup>、力に、そして歓喜に (酔っている)
- (13) 愚かな者どもは、姿は見えぬ (avyaktadarśanam)、汚れなき者によっても近づけない神ヴィシュヌが、猪の姿をしているとは気がつかないであろう<sup>101</sup>。
- (14) この猪が、勢いよく、地中に行った彼の恐ろしい低劣な悪魔たちが何千と住んでいるところに行って、(彼らを) 静めるであろう。」(それを) 聞いて、彼の<sup>102</sup>善良な神々は喜んだ<sup>103</sup>。
- (15) そしてヴィシュヌは猪の姿となって<sup>104</sup>地中に入り、ディティより生まれた者たちと出会った。
- (16) 集まっていたあらゆるダイトヤたちはこの人間ではない生き物を見て、まったく一度に<sup>105</sup>、すべての者が死神カーラによって麻痺させられてしまった。
- (17) そして(その後?) あらゆる(悪魔)は<sup>106</sup>、猪を攻撃し、同時に猪を捕えた。怒った者どもはその猪をあらゆる方向から引っ張った (vyakarśanta)。
- (18) しかしその時、大きな体をして、大きな力をもち、力によって成長した<sup>107</sup>ダーナヴァの主だった者たちは、彼に対して何もできなかったのである、力ある者よ。
- (19) 彼らダーナヴァの主な者たちは恐れから<sup>108</sup>驚きに至り<sup>109</sup>、何千回となく、自分に生じた疑問について考えた。
- (20) その時、彼のヨーガを本質とし、ヨーガを御者とし、神々の第一の神である至尊者は、バラタ族のすぐれた者よ、ヨーガを行って、
- (21) 大声を発し、ダイトヤとダーナヴァどもを震えさせた。その世界の十方に鳴り響いたる。

95 P. abhisamkīrṇām D. abhisamīrṇām

96 P. apakṛṣṭām D. aprahrṣṭām

97 P.は三行詩、D.は二行詩となっている。従って、以下、P.とD.の詩節は一行ずつずれることになる。

98 P. upamaradanam D. abhimardanam

99 P. śakyāmahe D. śakṣyāmahe

100 P. vareṇābhisamṃmattā D. vareṇābhisamṃpannā

101 P. nāvabotsyanti D. nāvabudhyanti

102 P. śrutvā te D. tac chrutvā

103 P.は三行詩、D.は二行詩となっている。従って、以下、P.とD.の詩節番号は一つずつずれることになる。

104 P. āśritaḥ D. āsthitaḥ

105 P. prasahya sahasā D. prasahya tarasā

106 P. sarve ca D. tatas te

107 P. mahāvīryā balocchritāḥ D. mahāvīryabalocchrtāḥ

108 P. bhayāt D. bhayaṃ

109 P. agaman D. agacchan

- (22) 吼えた声によって、もろもろの世界は震動した<sup>110</sup>。そしてインドラを指導者とする神々はあらゆる方角で放心した (sambhrānta)<sup>111</sup>。
- (23) そしてその時世界 (jagat) もまたまったく動きがなくなった。動く者も動かぬ者もその声によって麻痺したのである。
- (24) それから彼のダーナヴァどもはすべてその声におびえて、呼吸を失って倒れ、また、ヴィシュヌの熱力によって麻痺したのである<sup>112</sup>。
- (25) そして<sup>113</sup>地下世界 (rasātala) に行った猪は、神々を憎む者の<sup>114</sup>肉と脂肪と骨の塊を<sup>115</sup>爪で引き裂いた<sup>116</sup>。
- (26) 蓮の華を臍にもち、偉大なヨーギンであり、生き物の師であり、生き物の王である彼は、その大きな声によって「永遠のもの」と<sup>117</sup>伝承されている。
- (27) それからすべての神々の群れは祖父に (次のように) 話しかけた<sup>118</sup>。「神よ、この声はどのようなものか。我々はそれを<sup>119</sup>知らないのである、力ある者よ<sup>120</sup>。生き物が震えるこの声は何であり、誰のものか。」
- (28) この時<sup>121</sup>、猪の姿をした偉大なる神<sup>122</sup>ヴィシュヌは偉大な聖仙たちに賞賛されつつ立ち上がった。

祖父 (ヴィシュヌ) は言った。

- (29) ダーナヴァの王たちを打ち倒したこの神は、背が高く、大きな力を持ち、偉大なヨーギンであり、生き物の本体であり、生き物の創造者であり、
- (30) あらゆる生き物の支配者であり、ヨーギンであり、源であり<sup>123</sup>、そしてアートマンのアートマンである。確信すべし、これこそがクリシュナであり、あらゆる罪を滅する者である<sup>124</sup>。
- (31) 計り知れない威光を持ち、大きな幸運を持ち、大きな尊厳を持ち、蓮の華を臍にもち、偉大なヨーギンであり、生き物の本体であり<sup>125</sup>、生き物の創造者は、この不可能な

110 P. lokāḥ saṃkṣobham āgaman D. lokānāṃ kṣobha āgamāt

111 P. sambhrāntāś ca diśaḥ sarvā devāḥ D. saṃtrastāś ca bhṛṣaṃ loke devāḥ

112 P. viṣṇutejovimohitāḥ D. viṣṇutejaḥpramohitāḥ

113 P. caiva D. cāpi

114 P. tridaśadviṣaḥ D. tridaśadvīṣām

115 P. māṃsamedosthisamcayam D. māṃsamedosthisamcayān

116 P. saṃdārayāmāsa D. vidārayāmāsa

117 sanātana iti N. sanāt satataman iti bhoktānugrahārtham ceṣṭata iti sanātanaḥ sanādana ity apekṣite dakārasthāne takāro nair uktaḥ nādena saha vartamānaḥ sanātana iti yogasya darśitatvāt

118 P. upābruvan D. upādravan D.は次の詩節を挿入し cd 句としている。

tatra gatvā mahātmānam ūcuś caiva jagatpatim /28/

従って、P.の第27詩節の三行詩にはD.の二行詩二つが対応していることになる。

119 P. nainaṃ D. naitaṃ

120 P. vibho D. prabho

121 D.はこの前に次の句を挿入し、三行詩としている。

devāś ca dānavāś caiva mohitās tasya tejasā /

122 P. mahādevaḥ D. mahābāho

123 P. yonir D. munir

124 P. sarvapāpaprāṇāśanaḥ D. sarvavighnavināśanaḥ

125 P. bhūtātmā D. mahātmā

偉業を上首尾に行った後、自ら自分自身に戻ったのである<sup>126</sup>。

(33) もはや苦しみもなく、恐れが生じることもなく、あるいは悲しみもない、すぐれた神々よ。彼は規範であり、創造であり、また物を消滅させる時 (kāla) である。世界を維持するこの偉大なる者によって<sup>127</sup>声は発せられたのである。

(33) まさしく彼は<sup>128</sup>、大きな幸運をもち<sup>129</sup>、あらゆる世間から尊敬され、不動にして蓮の華の目をもち、一切の生き物の創造者である<sup>130</sup>。

(1996年8月30日 受理)

---

126 P.の31, 32詩節はそれぞれ三行詩である。これに D.は二行詩三つが対応している

127 P. dhārayatānena D. dhārayatā tena

128 P. sa eva D. sa eṣa

129 P. mahābhāgaḥ D. mahābāhuḥ

130 P. sarvabhūtasamudbhavaḥ D. sarvabhūtādir īśvaraḥ